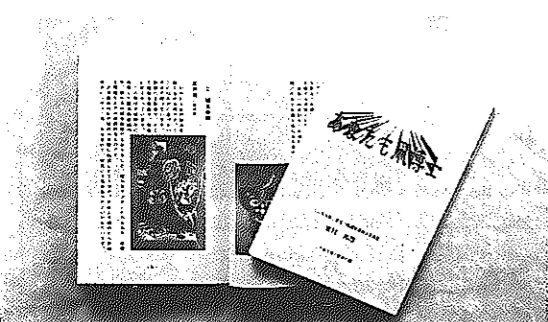


「あなたも風博士」が1冊の本に



広報しろね(15日号)で連載している「あなたも風博士」が、1冊の本になりました。これは、平成5年7月から10年12月まで紹介してきた世界中の風87点を地域別に分類し、「しろね大風と歴史の館」の展示品の解説書も兼ねたものとして編集されています。風の解説だけでなく、執筆者の同館運営委員長の田村和雄さんがイベントに参加したときのエピソード、出会った人たちとの思い出なども書かれています。「あなたも風博士」は1冊1,500円。風に興味のある人にお薦めします。 ■問い合わせ 同館 ☎372・0314



泥んこになって田植えを体験

五月九日、親子田植え大会が市内の田んぼで行われ、参加者約九十人が、十アールの田んぼにもち米「コガネモチ」の苗を植えました。これは、十月に開催される「楽しもって秋まつり」のプレイベントとして行われたもの。このもち米を秋に収穫し、もちつき大会を行う予定です。同実行委員会の山崎稔会長が「土に親しむ機会が少なくなりました。親子で田植えを十分に楽しんでください」とあいさつ。参加者のほとんどは田植えが初めてとあって、泥んこになって苗を植えていました。

親子田植え大会



茨曾根伝承文化  
「おちよれかっぱ」

茨曾根太々神楽舞

「おちよれかっぱ」の呼び名で親しまれてきた茨曾根太々神楽舞。おちよれかっぱとこの面を着けて舞う時の笛の音がそう聞こえるところから、子供たちが呼ぶようになったものです。今年も四月三十日の夜宮と五月一日の春祭り、白根神社拜殿で茨曾根太々神楽舞が奉納されました。出雲大社から京都を経て伝わった神楽舞。茨曾根へは四百数十年前、越後の守護代長尾家の家臣がこの地に住み着き、伝えたといわれます。江戸時代の大庄屋関根家と吉田家の後援で格式と隆盛を極め、以降茨曾根地区に脈々と伝承されてきました。「昔は秋祭りになると近在の神社に呼ばれて舞って回り、十日も家に帰らないことがあった。今、舞い手は八人。中には高齢の人もいます。舞は二十種類ありますが、人数が足りなくて踊れない舞もあります」と、白根神社宮司の石崎浩さんは残念そうに話します。

地元の伝統芸能を残そうと、おとし「茨曾根太々神楽舞保存会」が組織されました。毎月第二土曜日に、下茨の諏訪神社の氏子センターで神楽舞を練習しています。

「昔、白根神社の春祭りでは木で組み立てられた舞臺で舞っていました。今は拜殿で行うので、神楽舞は無くなったと思う人もいます。途切れることなく引き継がれてきたこの伝統芸能を、もっと多くの人に知ってほしい」と保存会に協力している庭山幸明さんは話します。

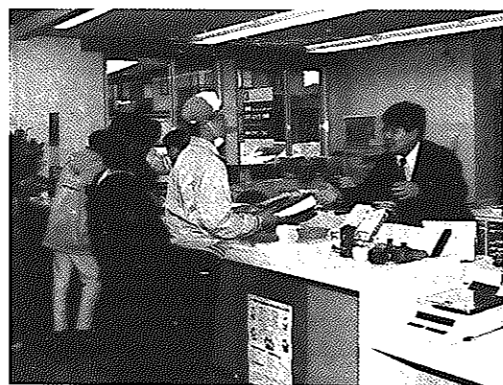
TOPICS



1時間で26袋分のごみ

白根郵便局  
国道8号クリーン作戦

地域に役立つボランティア活動を行うことを目的に、五月九日、白根郵便局の職員二十六人が国道8号沿いのごみ拾いを行いました。「国道8号クリーン作戦」と名付けられたこの活動は、同郵便局が昨年からは行っているもの。七軒から戸頭までの約三・五キロメートルを、四班に分かれて一斉にごみを拾い集めました。約一時間で集められたごみは、空き缶や空きビン、たばこの吸い殻などごみ袋で二十六袋。重さにして五八・五キロの量になり、参加者はポイ捨ての多さに驚いていました。



7年越しの願いが実現

白根大通郵便局開設

四月二十六日、大通地区に市内では七番目となる郵便局がオープンしました。局員は三人体制です。大通地区は現在およそ一千四百世帯、人口四千六百人以上。平成四年からの地域の開設要望が実現し、年々人口が増加する新興住宅地に生活の利便性の向上が図られました。この日、第一号の利用者となった高橋ミサラさん(大通南二)は、「以前は大野町郵便局まで徒歩や自転車で行っていました。ここはきれいで家からも近く、とても利用しやすいになりました」と話してくれました。

まちの話題

子ども風合戦に参戦



小林地区公民館  
ジュニア風工房

「子ども風合戦への参加と、小学校の子供たちにも風の楽しさを知ってもらおう」との目的で、四年前から始まったジュニア風工房が、五月八日、しろね大風と歴史の館で開かれました。この日は、同校の生徒約二十人が豊六枚分となる大風を二枚製作しました。骨となる竹を縄で固定する作業には参加者も一苦勞。ある参加者は「おとしから参加しています。色塗りや風揚げが楽しい」と話してくれました。六月二日の子ども風合戦には、上位入賞を狙います。

開講、市民文化講座

中央公民館



毎年中央公民館で行われている市民文化講座が、今年も開講しました。五月十一日から始まった日本画講座には募集定員を上回る二十二人が参加。「私は初めての受講。絵を見るのは好きだが、描くのは小学校以来」と緊張した様子の人も。講師の外川利雄先生は「絵は感性を磨くもの。上手下手でなく、大切なのはよく見て描くことです」と話しました。講座は日本画のほか陶芸、白根絞り、版画、オカリナ、ハンダがあり、年間を通して十一回から十五回行われます。